

冰心「最後の安息」「西風」〔共訳〕

虞 萍 星 野 幸 代

解題

冰心〔謝冰心とも〕は本名謝婉瑩、女流作家、詩人、エッセイスト。穏やかで慈愛に満ちた語り口で真、善、美を追求する作風で知られ、中国では「文学の祖母」と称されている。1900年中国福建省で清朝の軍人の家に生まれ、1999年北京で没した。

裕福な家で両親の愛情に包まれて育った冰心は、燕京大学文学科卒業後、米国ウェルズリー大学へ留学し、文学修士号を得ている。大学生であった1919年、初めて「冰心」の名で短篇小说を発表。口語体による小説が出始めたばかりの1920年代中国において、彼女の小説は女性問題、青年問題、平和問題を提起し、一世を風靡した。さらに詩、散文の分野でも単行本を出し、高く評価された。共産党中国のもとでは思想的に批判され不遇な時期もあったが、ほぼ生涯に渡り創作、エッセイを発表し、数々の社会活動に関わり続けた。1949 - 1951年には東京大学で外国人女性としては初めての客員講師として近代中国文学を講じている。80歳を過ぎて発表した短篇が全国優秀短編小説賞を獲得するなど、晩年は新たな境地にいたった。『冰心全集』全九巻(卓如編、海峽出版社、1999年)がある。なお、1992年に冰心研究会が発足し、1997年8月には福建省長楽市に冰心文学館が開館した。

日本での翻訳単行本には、倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの國のみなさまへ』(三省堂、1942年)、『タオー・チーの夏休み日記』(岩波書店、1947年)、『謝冰心自選集 お冬さん』(河出書房、1951年)、竹内実訳『女の人について』(朝日新聞社、1993年)などがある。

ここに訳出した「最後の安らぎ(原題:最後の安息)」は初出1920年3月11日 13日『晨报』、「西風(原題:西風)」は初出1936年7月1日『文学季刊』第1巻第2期、翻訳底本はいずれも『冰心全集』(前掲)による。前者は、旧中国の農村でしばしば見られた「童養媳」(息子の幼少時に将来の嫁として、また労働力として引き取る女の子)虐待問題を扱っている。後者は、当時まだまだ少数であった知識人女性をヒロインとし、充実したキャリアと私生活の孤独との葛藤とを扱っている。いずれも、今日女性学による近現代中国文学の見直しの中で、注目される小説である。

「最後の安らぎ」は既訳に伊藤貴磨訳『最後のいこひ』(増進堂、1946年)がある。

最後の安らぎ

^{ホイクー} 恵姑はまる12年間都会で育ってきて、生まれてこのかた田舎の景色というものを知らなかった。この年の夏、父親の別荘が出来上がったため、一家は田舎へ避暑にやって来た。恵姑は何もかもうれしくてたまらないようで、玄関前の大きな木の下に座って、静かに農民の田植え歌に耳をかたむけたりした。野の花にとまった蝶々がひらひらと頭上を飛んで行く。溢れる緑のなかに農家が立ち並んでいる。はるか向こうでは、鮮やかな色の服を着た女が口バに乗り、ゆうゆうと小道を進んでいる。恵姑にとってそんな光景はとても新鮮で面白く、まるで別世界であった。

その日の午後、恵姑は昼寝から覚めて一人で階下へ降りて来ると、庭はひっそりと物音一つしない。ひさしの下でしばらくうろうろしているうちに、ふと恵姑は自転車のことを思い出し、ずいぶん乗っていないわ、今日は暇だし、あれで遊ぼうと思い、奥から自転車を引っ張って門の外へ出ると、狭い道を走り出した。坂を曲がると小川が見えてくる。岸に沿って桃と柳の木が植えられ、風景がとても美しかったので、眺めながらついつい遠くまで来てしまった。小川が途切れたところで、思いがけず急な下り坂にさしかかり、自転車が止まらなくなってしまった。恵姑は怖くなり、慌ててブレーキをかけてももう間に合わない、並木が後ろへ飛び過ぎていくばかりで、今にも川に落ちそうなのに、恵姑は怖くてキャーキャー叫ぶばかりだ。と、後ろから誰かに引っ張られるような感じがしたかと思うと自転車が横転し、恵姑も地面に投げ出された。起き上がって見ると、一人の田舎娘が後輪を引っ張ってくれたのだった。恵姑は息をはずませて服の土を払い、娘にお礼を言った。娘は見たところ十三、四歳ぐらい、真っ黒な顔にみすぼらしいかっこうだったが、素朴で人なつこい様子だ。

「お嬢さん、すんでのところまで落ちそうだったね、川に落ちたら大ごとだよ。」娘は笑って言う。恵姑も笑った。「ほんとね、この道に慣れてなくて、あなたが後ろから引っ張ってくれなかったら落ちてたわ。」娘は恵姑をしばらく見つめ、尋ねた。

「お嬢さんは山の裏の洋館に住んでいなさるね。」

「何でわかるの。」

「ちょっと前に洋館のご主人が引っ越してきたと聞いたんだ。お嬢さんはここいらの人っぽくないから、そうだろうと思って、……」

「そうよ、あなたの名前は。家の人。」恵姑はうなずいて言った。

「名前は^{ツゾール}翠児、家には母ちゃんと、弟が二人と妹が三人いる。四歳の時、父ちゃんと母ちゃんが死んだんで、ここに来たんです。」

「今のお母さんというのは、ご両親のどちらかの親戚なの。」翠児は頭を横に振った。「どっちでもないよ。」恵姑はしばらく考えて、はっと翠児は^{トクヤンシー}童養媳【「解題」参照】に違いな

いと思ひ当たり、尋ねた。「お母さんはやさしくしてくれるの。」翠児は答えず、目を赤くした。顔をあげて日あしをうかがうと「もう日が暮れるから行かなきゃ、遅くなると母ちゃんがまた……」翠児はそう言って水がめをぐっと持ち上げ、行こうとした。恵姑は水がめがとても大きく、満杯に水が入っているのを見てとった。

「一人では無理よ、手伝うわ。」

「けっこうです、お嬢さんじゃあもっと無理だよ、服が濡れるし、あたし一人で大丈夫。」翠児は答えると、ふらつきながら水がめを持ち上げ、一步一步引きずるように、後も見ずに行ってしまった。

恵姑は小川の岸にたたずみ、翠児の後ろ姿を見ながら思った。「あの子のみじめな様子を見て御覧なさい、お母さんにどれぐらいいじめられているか知れないわ。かわいそうに、私よりたった二、三歳くらいしか年上じゃないのに一日中あんな大変な仕事をしているなんて。神様は不公平ね。」とその時、何ばあやが後ろで叫んだ。「お嬢さま、ここにおいででしたか、さんざん探したんですよ。」恵姑は振り向いてにこっとし、ゆっくりと自転車の向きをかえた。何ばあやは自転車を受け取って言う。

「お嬢さま、いつの間にお出かけなさったのですか、お伴いたしますのに。先ほど奥さまが下に降りていらして、お嬢さんが見当たらないとおっしゃってとても心配なさっていましたよ。これからは絶対に一人で出てはなりませんよ、万が一……」

「もういいでしょ、ほんのたまに一人で出かけたくらいで、そんな大騒ぎしないでちょうだい。」恵姑は笑ってさえぎった。何ばあやも笑って恵姑の手をとり、一緒に家へ向かった。歩きながら恵姑は何ばあやに翠児に会ったことを話したが、自転車で危ない目にあったことだけは伏せておいた。何ばあやはため息をついた。

「私も村のおかみさんたちに聞きましたよ。あの子の姑は本当に厳しくて、あの子にひどく当たるらしいんです。翠児が来て二ヶ月も経たないで父親がなくなったので、姑は一日中翠を叱り通して、あの子の星まわりが悪いせいで父親が死んだのだから、いじめて凍えさせて餓えさせておいてやる、と言うのです。でもあの子はやさしくて人気者だそうですよ。」話すうちに家に着いた。恵姑の両親はバルコニーの手すりまで伸び上がり、娘が帰って来たのを見て喜んだが、それでも小言を言った。恵姑はにっこりして素直に聞いていたが、頭ではずっと翠児の境遇を思い、心を痛めていた。

翌朝、恵姑はまた川へ翠児を探しに行ったが、会えないのでしばらく待ってみた。この時間には翠児は出られないのかもしれない。もっと待ちたかったが、母が心配するかもしれないので、仕方なくしょんぼりと家に帰った。

午後、恵姑は階下へ降りて何ばあやに言った。「ちょっと出かけるわ、もしお母様が探していたら、山の麓で遊んでいると伝えてちょうだい。」何ばあやが承知したので、恵姑はのんびりと山の方へ行くと、翠児が川辺にしゃがんで洗濯しているのが遠くから見え

たので、近づいて「翠児」と声をかけた。翠児が顔をあげると、恵姑はその目が腫れあがり、顔にはくっきりと爪痕が残っているのを見て、驚いてすぐそばまで近寄って言った。

「翠児、どうしたの。」

「なんでもないよ。」翠児は何とか返事をした。でもそれは泣き声で、答えながらもごしごしと洗濯を続けた。恵姑もそれ以上追求せず、汚れていない石の上に腰かけてじっと翠児を見つめ、しばらくして言った。

「翠児、残りの服は私が代わりに洗濯するわ、ちょっと休んだら。」思いやりのあるやさしい言葉に、翠児ははっと胸をつかれた

あわれな翠児はこの世に生まれて十四年間、こんな憐れみの心や、やさしい言葉に触れたことはなかった。翠児の頭は悲しみと恐怖で一杯で、体で感じたのは鞭と寒さ、そしてひどい思いばかりであった。翠児は世の中の愛とは何か、楽しみとは何かをも知らず、ひたすら暗い日々を過ごしてきた。もしたまたま誰かに何かやさしい言葉をかけられたとしても、妙だと思うだけで、嬉しいとも思わず、この世にそんなやさしい人が存在するのを信じられないかのようなだった。だから昨日恵姑が翠児の苦勞をいたわってくれたときもあいまいな態度しかとれず、一人で立ち去ってしまったのだ。

けさ翠児は早起きして、忙いで火をおこしご飯を炊いた。二人の弟が何の原因か喧嘩を始め庭で騒いでいる。姑が目を覚ませばまた翠児のせいにされてしまうから、翠児は急いで喧嘩を止めた。すると弟たちは翠児にやつあたりし、彼女の顔をひっかいて怒鳴った。

「俺たちを止める身分かよ、早く台所に隠れるよ、母ちゃんが起きたらまた殴られるぞ。」翠児はこれ以上弟たちを止められないと思い、台所に向かうと弟たちは追いかけて来た。翠児は隠れて防ぎながら泣いて言った。

「よして、もうやめて、ご飯がこげてしまうよ。」弟たちは鍋の蓋を開けて、叫んだ。

「母ちゃん、ほら翠児が、飯がこげているのに、すみっこに隠れて泣いてる。」姑は向こうの部屋から出て来て、髪の毛を振り乱し、服をひっかけながら台所に入ると鍋半分ぐらいのお湯を翠児の顔にぶちまけて、叱った。

「お前は何で年がら年中泣いているんだい、そのうち私を泣き殺せば本望だろうさ。」翠児の顔にも手にも大きな火ぶくれができていた。泣きながら言いわけしようとする、弟たちが翠児を力づくで外に追い出した。姑はぶりぶりしながら自分でご飯を作って、自分の子供たちと一緒に食べた。翠児は庭に隠れて粉ひき機をまわし、家の中には怖くてとても入れなかった。姑が昼寝をはじめると、翠児はようやくしおしおと部屋中の汚れた服を拾い集め、川に行き座って洗った。腕の火傷に水がかかると、ひりひりとしみて痛かった。翠児は洗濯しながら、ただただ泣いていた。

そこへ恵姑が来て翠児に声をかけた。その時翠児はまだ、恵姑は遊びに来ただけだと思ひ、からかわれるかもしれないとも思ったので素っ気ない返事しかしなかった。しかし恵姑は隣に座りこみ、同情して翠児を見つめ、手伝ってあげると言ったのだ。翠児は顔をあげてしばらく恵姑を見ていると、突然自分の心の闇にさっと一筋の光が差したように思えた。この時、翠児の頭の中は新しい感情で溢れ、感激と苦痛とが怒涛のように一気に湧いてきて、すすり泣きながら襟で顔を隠していたが、だんだんひどくしゃくりあげ、持っていた洗濯物も水に落としてしまった。恵姑は翠児に近よって洗濯物を拾いあげ、翠児のそばに立って赤茶けてぼさぼさの髪を後ろになでつけてやり、翠児の背をさすった。恵姑の目にも涙がこぼれそうだったが、泣かずにうつむいて翠児を見ていた。慈愛の光が翠児を包んだ。二人の影が河に映っており、外見は貧富と教養とで天地ほどの差があったが、純真な心からの同情と感謝の念は二人の心を結びつけ、愛が溢れ神妙な世界を作り出していた。

それ以来、恵姑の活発で無垢な頭の中に人への思いやりが加わった。翠児は本当に可愛らしく哀れな人だと思ひ、同時に世界中の数え切れないほどの貧しい人々に思いをはせ、翠児を貧しい人たちの代表としていたわり、慰めようと思つた。恵姑は翠児に町のことをすべて話してやり、毎日必ずお菓子や飴などを持って行ったり、自分が遊んだおもちゃを翠児にあげたりした。しかし翠児はそういうものを持って帰ろうとはしなかった。弟妹たちにとられるかもしれない、万が一恵姑が自分にこんなに良くしてくれていると姑が知ったら、外に出してもらえなくなるかもしれない。だから遊び終わると恵姑はおもちゃを片付けて、翌日また持って来ることにし、お菓子や飴はその場で食べてしまった。二人は毎日1時間の暇をみつけては一緒に遊び、翠児も今では恵姑が手伝うにまかせ、一緒に洗濯したり、水を汲んだりしながら話をする。学校でクラスメートと一緒に遊んでも、これほどうまが合わないし楽しくはないと思つた。翠児の心はだんだん闇から光の方へ向かい、世の中には悲しみと恐怖、鞭、寒さ、ひもじさだけがあるのではないと思つた。姑にはあいかわらず殴られ叱られるけれど、翠児の辛さと楽しさの度合いは、以前とは全然違ってきた。

楽しい夏がもうすぐ終わるある日の午後、恵姑は窓の前に立って、戸外の大雨を見つめていた。向こうの山の上に濛々と雲がかかって、草の色はますます緑濃く、別荘の木の葉が雨に打たれてふるえている。恵姑はふと夏休みが残り少ないことに気が付き、学校に行つてまた先生とクラスメートに会えると思つると嬉しくなつた。そう思つたところへ、母が後ろから声をかけた。

「恵姑、今日はつまらなそうね。」恵姑は笑つて振り向くと母の前に行つて座り、頭を母のひざにもたせかけた。何ばあやはその隣で笑つて言った。

「お嬢さまは今日外で翠児と遊べなかったから、お寂しいのでございますよ。」恵姑ははっとした。帰ることを翠児に一言伝えなければ。母は笑って言った。

「翠児っていう子はどんなにかわいい子なのかしら、あなたとそんなに仲がいいなんて。二、三日したら、あなたも帰る気になるかしらね。」

「奥様、もっと面白いことがございますよ。ある日お嬢様にお菓子を持って参りましたら、二人で川っぶちに座って洗濯したり、水を汲んだりしながら笑ってお話してらして、とても楽しそうなんです。お嬢さまは家でそんなお仕事をなさったことなどございませんのに、翠児と一緒にだと喜んでなさるんですからね。」

「かまいませんよ、いくらか辛抱を学んだでしょうからね。これからは……」向こうの窓際に新聞を読んでいた父はここまで聞くと、新聞を置いて言った。

「この子はとても慈愛深い心を持っている、前に翠児の辛い境遇について話してくれたよ。どうかして助けたいとも言った。だから私はこの子を毎日自由に外出させておいた。田舎者は教育を受けたことがないから、翠児の姑のように頑固で非情な人が出てくるし、翠児のようなかわいそうで逃げ場もない女の子もいる。恵姑はそういう苦しみを知ったのだから、将来必ず助ける方法を見つけられると思うよ。恵姑、お前はそう思っているのだろう。」恵姑は聞きながら、きらきらとした涙をいっぱい浮かべて立ちあがると父の前に行き、膝の上の新聞を取って広げて椅子によりそって立ち、しばらく黙って考えてから頼んだ。

「私が帰ってしまって、ちよくちよく来られなくなると翠児がますます辛い思いをするのではないかしら。お父さま、翠児をつれて帰ってはだめ。」

「おばかさん、他家の童養^{よこ}媳を、そう簡単に連れて帰れるかね。」父は笑いながら答えた。

「あの子を買うわけにはいかないかしら。」

「誰が童養^{よこ}媳を売るものですか。姑がきっと承知しませんよ。」何ばあやが首を振って言った。母が言った。

「どうせお正月の時にまた来るでしょう、もう会えないわけではないし、翠児の状況も少しはよくなるかもしれないわ、安心なさいな。」恵姑は返事をせず、しばらく父の腕にもたれていてからたずねた。

「お母さま、私たちいつ帰るの。」

「晴れたらすぐ帰りますよ。」

「ずいぶん遊んでしまったから、私も戻って学校に行きたいわ。」恵姑は笑って言うと、何ばあやが笑った。

「あせることはございませんよ、お嬢さまはじきに勉強に飽き飽きなさいますわ。」皆はどっと笑った。

また二日が過ぎて、雨がやっとおさまってきたが、ちりのように細かい雨粒がたえず

降り注いでいた。恵姑は翠に会いに行こうと思った。庭に出るとちょっと肌寒く、地面もとても滑りやすくなっているの、家に戻ってもう一枚服をはおって靴をかえ、麦わら帽子をかぶってからのんびりと川辺に向かった。小川は溢れんばかりで流れも速く、普段二人が座る石も水につかっていた。しかし翠児は見当たらなかった。恵姑はしばらく立っていたが、ひどく寒かった。帰ろうと思った時、翠児が水がめを提げて向こうからやって来た。恵姑を見つけるたとたんさっと水がめを置き、笑って言った。

「お嬢さんしばらく出掛けなかったね。」

「雨のせいでとじこもっていたの、あなたの方はどうだった。」翠児は首を横に振って言った。「相変わらずだよ、よくなんかならない。」恵姑は翠の髪にすっかり水滴がついているのを見て言った。

「木の下で雨やどりしましょう、びしょぬれになってしまうわ。」言いながら一緒に木の下に移った。翠児は笑って言った。

「このあいだお嬢さんが教えてくれた字、木の枝で壁にみんな書いて、何日も読んで全部暗記したんだ。もっと新しいの教えてくださいよ。」

「いいわよ、もっと教えてあげる。もともと私もそんなに字を知らないし、あなたは覚えるのがとても早いから、あっという間に追い越されるかもしれないわ。」恵姑は笑って答えた。翠児はとても嬉しくなり、言った。

「いつ追いつけるかな、毎日もっとたくさんの字を教わったら、もしかして一、二年後には……」恵姑は額にしわをよせてさえぎった。「言い忘れていたんだけど、私たち 私たちもうすぐ町に戻らなければならないから、毎日教えられるの。」翠児はこれを聞いて、思いがけないことに呆然とし、急いで尋ねた。

「本当、お嬢さん、冗談はなしだよ。」

「本当なの、晴れたら帰らなければならないとお母さまが言ったの。」

「お嬢さんの家はここにあるのに。」

「町にも家があるの。ここに来るのは夏を過ごす間だけで、長くは住まないのよ、それに私は帰って学校に行かなければならないわ。」

「お嬢さん、今度はいつ来るの。」

「たぶんお正月と夏に来るわ。あなたは辛抱して家で待っていて、お正月の時また一緒に遊びましょう。」翠児は水を汲むのも忘れて立ちすくみ、恵姑も何も言わず静かに彼女を見つめていた。しばらくたつと、翠児は突然言った。

「お嬢さんが行ってしまったら、もっと辛くなる、お嬢さん何とかして連れて行ってくださいませんか。」恵姑はそんなことを言われるとは思っていなかったの、しばらく返答に窮していたが、いやいやながら言った。

「お家の方はそうはいかないでしょ、連れて行くわけにはいかないのよ。」翠児はたまた

ず泣き出し、しゃくりあげながら言った。

「家の人が私を人間扱いしてくれないのは、お嬢さんもご存知でしょう、今日のところは生きていて明日はどうか、正月までなんて待てない、お嬢さん、助けてください。」恵姑は翠児の様子を見て、とても悲しくなり、なだめた。「悲しまないで、何があっても帰ってくるから、連れて行ってといわれても、とても無理よ、とりあえず……」

翠児の姑は翠が水を汲みに出て、長いこと経っても帰って来ないので、翠児がまたどこかでこっそり怠けていると思い、外に探しに出た。川辺に来ると、翠児が一人の白い服を着た女の子と一緒に立っているのを見つけた。姑は後ろからそっと忍び寄り、翠児たちの会話をすっかり聞いてしまうと、とたんにかんかん腹を立てて駆け寄った。翠児と恵姑はびっくりして飛び上がった。恵姑はまだそれが誰なのか知らなかったが、翠児が真っ青になって恵姑の後ろに隠れようとするのを見た。姑は翠児の襟をひっつかみ、殴りながら叱った。

「このろくでなしが、影で人の悪口を言って、私があんたを人間扱いしないだって。」翠児は痛くて泣き叫んだ。恵姑は怖くなり、進み出て言った。

「やめてください、翠児は別に何も言っただけは……」

「姑が嫁をしつけてるんだ、お嬢さんのお情けは無用だよ、お嬢さんがこの子をつれていったら、人さらいで罰せられるからね。姑は冷笑してそういうと、翠児をひっぱって行ってしまった。恵姑は生まれてから一度もそんなことは言われたことがなかったので、頬を真っ赤に染めて涙がこぼれそうになり、両手を握り締めて翠児を見送った。家へかけ戻ると、くやしくてたまらず、翠児がかわいそうでずいぶん泣いた。両親に知られたくもなかった。恵姑が村の女と喧嘩するなんて、体裁が悪いと言うかもしれない。

翌日は雨が止んだ。恵姑は昨日のことを思うと翠児が心配でたまらなかったが、怖くて行けない。午後やっぱり翠児は見当たらなかった。独り寂しく家で使用人たちが荷物をまとめるのを見ていた。晩御飯のあとしばらくして、添い寝をしてもらおうと何ばあやを下へ探しに行った。何ばあやは村の女たちと玄関の前で話していたが、一人の女が言うのが耳に入った。

「今度こそ翠児はまず死んじゃうね、なぜだか知らないけどお姑さんが翠児が逃げようとしたと言って、殴って半殺しにしたんだ。昨夜はまだ泣き声が聞こえてたけど、今日は何も聞こえなかったから、たぶん……」恵姑はどきっとして、慌てて出て行って問いただそうとすると、何ばあやが振り向いて恵姑を見つけて女たちに手を振り、女たちはぱたりと話をやめた。恵姑の母が上で呼んだ、「何ばあや、恵姑の自転車は。」何ばあやは立ち上がって返事をしながら、恵姑の手をとって言った。

「上に参りましょう、もうおそいですから。」

「先にお行き、お母様がお呼びよ、私はもうしばらくいるわ。」何ばあやは仕方なく恵姑

を残して階上へ向かった。恵姑は急いで尋ねた。

「翠児がどうかしたの。」

「翠児の話なんてしてませんよ。」女たちは笑って答えた。恵姑は焦立って言った。

「私になら言っても大丈夫よ。」

「昨日お姑さんがあの子を殴っていただけです、別にたいしたことではないよ。」

「翠児の家はどこ。」

「山のふもとのお寺の隣に南向きの門があって、門の前に柳の木が何本かあるとこさ。」

そのとき何ばあやがまた出てきて女たちと言葉を交わし、恵姑を家に連れて入ってしまった。

その晩、恵姑は寝つかれず、空が白みはじめるとすぐにこっそり起き出して、そっと下りて行って門を開け、山のふもとの方に歩き出した。芝生には露の玉がいっぱいで、涼しげな風が苗に吹きつけ、地平線の朝焼けが真っ赤に照り映えているが、太陽はまだ昇っておらず、木の上では雀がさえずっていた。お寺へいってみると確かに南向きの門があり、中をのぞくと二人の女の子が庭で遊んでいる。その子たちはふいに恵姑が門の前に立っているのを見つけ、にこにこして出て来た。

「ここに翠児という名前の子がいる。」恵姑は尋ねた。

「いるよ、お嬢さん何の用だい。」

「会いたいんだけど。」女の子たちはこれを聞くと母親を呼ぼうとした。恵姑は急いで手を振って言った。「いいのよ、あなたたち連れて行ってちょうだいな。」こう言いながら、小銭を握らせた。女の子たちはわっと喜んで受け取り、恵姑を中に案内した。恵姑は小声で聞いた。

「お母さんは。」

「まだ寝てる。」

「いいのよ、起こさないでね、すぐ帰るから。」言っているうちにあばら屋につき、女の子たちは指さして言った。

「翠児は中だよ。」

「もう行っていいわ、ありがとう。」戸を押して中に入ると、中は真っ暗で、臭い匂いが鼻をつき、翠児がどこにいるのかも分からないので、小声で呼んでみると、隅の方から弱々しい声が答えた。恵姑が近寄って見ると、翠児は土のオンドルの上に身体を曲げて寝ており、顔に涙の痕が微かに見え、足もとにぼろぼろの綿くずがつみ上げてあった。恵姑はきゅっと胸が痛み、オンドルに座って翠児の身体を軽く叩きながら言った。「翠児、私よ。」翠児の目がゆっくりと開き、はっと恵姑を見とめて眉と目を動かしたが、何か言おうにも声が出ず泣こうにも涙が出ない様子だった。恵姑はたまらず涙をこぼし、翠児の手をとって涙をこらえて座っていた。翠児も何も言わず、虫の息で、眠ってしまっ

たように見えた。しばらくたつと微かな声が聞こえた、「お嬢さん……字を……あたしはみんな……」突然はっきりと言った。「お嬢さん、ほら、川が流れる音……」恵姑は無理に微笑んで頷くと翠児も笑って目をつぶり、そろそろと恵姑の手を胸もとに引き寄せた。その手は堅く堅く握り締められ、冷や汗がほとばしりそうだと恵姑は感じた。しばらくたつと、翠児はゆっくりと寝返りをうち、口の中で歌を歌っているようだったがはっきりとは聞き取れず、そのうち声を立てなくなった。恵姑は長いこと座っていたが、翠児は眠ったのだと思いきと立ち上がったのぞきこむと、やつれて傷だらけの顔には微笑が浮かんでおり、まばゆい朝日が暗い窓格子からさんさんとふり注いで、翠児の顔を照らし、天国へと導くかのようだった。これが哀れな翠児の初めての安らぎであり、そして最後の安らぎであった。

西風*1

チウシン
秋心は車の窓際に頬づえをつき、目の前を行き過ぎていくもの寂しい大地をぼんやりと見つめていた。「秋はふけゆく。」わびしく、たまらなくやるせない心が、低く呼びかけてくる。

畑では取り入れがすっかり終わり、つんつんと短く刈られたコウリヤンの堅い切り株が、黄昏の薄い陽射しの中で薄く細長い影をのばしている。野草は黄色く枯れ、土も乾ききってひび割れている。線路の両側を過ぎゆく柳の黄色い枝は、秋風と土ぼこりの中で揺れ、哀れっぽく頼りなげな風情をかもし出している。「秋はふけゆく。」秋心は覚えずふっとため息をついた。

このところうすうす気付いてはいたけれど、ここ一日二日ますますやり切れなくなってきた気がする。秋心は一人旅の道すがら、車窓の外に際限なく広がる黄色く枯れた落ち葉を見つめ、もの寂しく吹きすさぶ秋風を聞いているとまた気が滅入ってきた。

所在なくちょっと服を整え、姿勢よく座り直して、それぞれ向かい合わせに座っている旅の道づれを見やると、皆この悠久で単調な震動に疲れているようだった。おしゃべりしていた人がしばし息をつき、あくびをしながら背伸びをして、大声でお茶のおかわりを頼んだ。小さな子供が、窓の外をぼうっと眺めている母親の背中に寄りかかって眠っている。すべてが疲れ、乱れ、そして退屈。「すべて、私の人生の同伴者。」秋心は眉をひそめて、また窓の外を眺めた。

「さらば秋心、君の仕事は神聖だ、平凡な僕などそもそも君の前途の光を阻むべきではなかった。ここに敬意を込めて哀しく君に手を振る。僕は垣根の片隅にぼつんと咲く花のように退き下がって立ち、君が満月の銀色の光に包まれて天のかなたからしずしずと昇っていくのを仰いでいよう。」

『さらば我が友、ここに僕は最後の敬愛を捧げる、最後に僕が忠誠を誓うのを許して欲しい。いつの日か、僕たちが共に『西風が地をさか巻き、半ばかけた名残の月』の中年に到ったころ、一抹の寂しさと感傷の兆しが君の心をよぎった時には、忘れないで欲しい、一つの誠実なる魂が君に付きしたが、い、ささやかな慰めをいつでも喜んで献げることを。』

これは秋心から拒絶の手紙を受け取った遠が、彼女に宛てた最後の手紙の結びの言葉だ。「西風が地をさか巻く」今日、秋心はふっと思い出した。あっという間の十年であった。彼があの手紙を書いてから、しばらく経って結婚したのを知っている。「これが男ってものよ。」秋心はそのとき少し幻滅したものだ。「男が求めるのは自分の生活を安定させてくれる奥さんだけ、愛とか、忠実とか言ってみても恋愛中に人をかどわかすための言葉にすぎない。遠はいつも私がいなくなったら未来はないと言っていたくせに、ほら、平気で捨てるじゃないの。」彼女自身も妙齢であったし、遠には好意を抱いていたけれど、自分の洋々たる前途を思うと、長年培ってきた教育を無にして従順な妻におさまるなどできそうもなかった。遠の生活が一段落したのを知って秋心はかえって安心し、かすかに失望を覚えながらも、懇ろな手紙を書き送って彼らを祝福した。

あれから音信は絶え、人づてに遠の仕事は順調であること、彼が時々北平*2に来ていることも知ったが、十年間顔を合わせたことがなかった。遠がわざと避けていたのかもいずれ、あるいは縁がなかったのかもわからないが、秋心は遠のことが少し気になっていた。

「一抹の寂しさと感傷の兆しが君の心をよぎった時に……」秋心はほっとため息をつくくと、何気なく立ち上がって服にかかった土ぼこりをはたき、財布を取りあげてふらふらと食堂車へ向かった。

食堂車はがらんとして三、四人しかおらず、てんでに新聞を読んだりタバコを吸ったり、軽食を済ませてすぐには席を立たず、どうやら食堂車が広々としているので気晴らしに来たらしい。秋心は黙ってドアに近いテーブルを選んで座り、コーヒーを一杯頼んだ。

左手で受け皿の縁をささえ、右手の指先で銀のスプーンを軽くつまみ、カップに立ち昇るかすかな湯気を秋心はぼんやりと見つめた。「……忘れないで欲しい、一つの誠実なる魂が君に付きしたが、い、……」バン、と食堂車のドアが閉まった。もの思いを中断されて秋心はものうげに顔を上げ、とたんに目を疑った。胸は高鳴り、顔に血が上った。入ってきたのは遠、十年ぶりの遠であった。

不意の事に、二人は動揺してしどろもどろに挨拶をかわした。遠の唇はこきざみに震えながら微笑んでいる。彼女に勤められるままに、彼は向かいに腰を下ろした。

気が鎮まると、秋心は顔を上げて遠をしげしげと見つめ、十年の歳月はいくらかも痕跡

を留めていないことをみとめた。彼は依然若々しかったが、顔は以前よりふっくらとしていた。小ざっぱりとした見なりで、右手の薬指には指輪が一つ加わっている。

遠も自分を見つめていたが、彼の驚きのまなざしに秋心は自分が老けたことをありありと見てとって、心がちょっと寒くなった。遠はもう完全に落ち着きを取り戻し、椅子にもたれて微笑んで言った。

「ここで君に会うとは思ってもよらなかったよ、元気だったかい、仕事はうまくいっているそうだね。」

「まあまあね、あなたの方はいかが。」秋心も微笑んで答えた。その言葉はため息のようであった。

「家族は上海に住んでいる、職場も上海だよ。」ウェイターがやって来たので、遠もコーヒーを一杯と茶菓子を一皿頼んだ。

「朝から晩まで忙しいけれど、仕事はそこそこ順調にしているし、家族も元気だ、僕はもう二児の父なんだよ。」彼は顔をほころばせた。

茶菓子が運ばれて来ると、遠は秋心に勧めながらどこに行くのかと尋ねた。秋心は言った。

「^{タンク}塘沽^{*3}で船に乗って、上海の会議に出席するの。船旅は久しぶりだから、のんびり道中を味わおうと思って。」

「ちょうどいい、君が乗るのは『順天』号だろう。僕もその船に乗るんだ。僕は海上の月を見るのが好きなんだが、上海に住んでいると月をゆっくり見ることもできないからね。」遠は嬉しそうに言った。

二人はしばらく窓の外を眺めていた。見渡すかぎり浅い河と葦の花で、そろそろ塘沽が見えて来るころだ。秋心はふと嬉しさがこみ上げてきて、微笑んで立ちあがり、言った。

「もうすぐ到着ね、荷物をまとめないと。」遠もさっと立ちあがって言った。

「僕ももう行くよ、ここの勘定は僕に任せてくれ、汽車で会おう。」言いながら、身をよじって秋心のために食堂車のドアを開けてくれた。その笑顔、そのすべてに、十年の空白が一気に消えてしまうように秋心は感じた。

小型列車にしばらく乗ると、船着き場に着いた。白い服をきた船主と船子たちが満面に笑みを浮かべて船の舷に並び、客を迎えている。

船のボーイが秋心を予約してあった部屋に案内してくれた。トランクを下ろすと、丸窓から岸にいる人足がすでにタラップを外しているのが見え、岸辺のすべてがすでに後方へ動き始めていた。黄色く濁った波が船にそっと触れては波音を立てている。部屋がすっかり薄暗くなっていたので、彼女は明かりのスイッチをひねった。

明かりで映し出された鏡に、秋心は髪に積もった埃、目の周りのくま、そして疲れきっ

て憔悴した表情を見とめた。「普通にはいかないわ。」彼女はしばらく立ちすくんでいたが、夕食の鐘の音を聞いてようやくはっとしたように、急いで服を着替えて顔を洗い、そして久方ぶりに紅を頬にうっすらとはたいた。

レストランへ行くと皆席についており、その広い部屋は外国人ばかりであった。遠は一人で丸テーブルに座っており、ボーイが秋心を遠のテーブルへ案内した。

遠も服を着替えたらしく、電灯の下に真っ白い襟、青地に白い水玉模様のネクタイ、青いスーツ、洗いたての顔、頬は健康的に紅潮している。秋心がやって来るのを見るとさっと立ち上がって椅子を引いてやり、二人は差し向かいに座った。顔を上げると、グラスと皿、料理、部屋に満ちている異国の言葉が、すっかり二人を十年前の外国での思い出へと送り込んだ。

二人はしばらく何を話したらよいかわからないままに、とりとめもなく中国と外国の料理の優劣について話していた。話しながら遠は向かいに座っている秋心を見つめ、午後会ったときより少し若やいだように思った。白い花を散らした薄青色の長めの服が、彼女のきゃしゃで小柄な体をびったりと包み込み、ずっと伸びた眉に涼やかな目は、相変わらず秀麗であった。ただ、化粧は彼女の目じりのわずかな皺を隠しきれず、黒く大きな瞳はもう十年前の活発で生き生きとした輝きを放っていなかった。

会話がだんだん滑り出すと、かつてのたくさんの友人の近況を話しては、互いに過ぎ去った歳月を嘆いた。友人たちの失敗談に話が及ぶと、秋心は思いのほか自然で、伸びやかな笑い声をあげた。

食事が終わると人々は次々と席を立っていった。秋心もゆっくりと立ち上がってドアの外に出ると、遠はついて来た。このとき船はすでに大沽口^{タウク-コウ}*4を出ており、海上には明るい月が昇り、波にはきらめく銀の星が揺れている。ゆったりとした海風の中で、二人は何の気なしにゆっくりと最上階に向かっていった。

上階の月の光はさらに明るく、影が黒い線で描いたように長くすべすべした甲板に映り、操縦室の外の艦橋の上に、白衣の船員がおぼろな月影のもと行ったり来たり巡視しているのが見え、タバコを吸いながら談笑しているのも聞こえる。四方を見まわして賛嘆したあと、秋心は月の方向を向いた椅子にかけ、遠も彼女の隣に座った。

天を見上げれば世界のすべてが消えてしまい、そこにあるのは明月と、大海原と、茫茫たる海天に向かって動いている一艘の見知らぬ船があるだけだ。この船の上には彼女と、遠しかいない、自分が十年の間折々心にかけてきた遠が、今奇跡のように自分のすぐ隣に座っている。彼女は満月の銀の光が空の果てからだんだん昇っていくのを見上げていた。「……忘れないで欲しい、一つの誠実なる魂が……」秋心は突然振り向いて遠を見つめると、心に慚愧の念が湧き起こってきた。

遠は彼女を見ておらず、月も眺めずに、きらきらと輝きながら流動している波を一心

に見つめており、そのまなざしはとても静かであった。秋心が自分の方を振り向いたのに気づくと彼もふり返り、微笑みながら何か言おうとしたが、月光のもと秋心の目にきらきらと今にもこぼれそうな二粒の涙のしずくを見とめて、彼はふいにためらい、軽く咳払いをしてまた黙りこんだ。

秋心は何とか笑顔を作り、涙がこぼれないように月を見上げて言った。

「海上の月はとても清々しいけれど、ちょっと寒いわ。」

「コートが要るかい。部屋へ行って取って来てあげようか。」言いながら遠は立ち上がったが、秋心も立ち上がって言った。

「いいの、もう下へ行くわ、昼間少し疲れたから、早めに休みましょうよ。」

遠は彼女をドアの前まで送り、おやすみと言うと戻って行った。秋心はドアを閉め、沈んだ様子でのろのろと服を脱ぎ、髪を解いた。この一日の出来事はあまりに突然すぎ、意外すぎ、夢のようで、彼女の心は乱れて、どこから思い出したらよいかわからなかった。彼女は自分の十年間の慌しい生活を恨んだ、自分の方から拒絶した遠なのに、再会してこぼれそうな涙を必死でこらえるだなんて。「これが女ってものね。」彼女は自嘲した。「結婚か仕事が決める前から、そんなことは全部気づいていたのに……これは遠のせいじゃない、ここ一年の疲れが気が緩んだところでうずいてきたせいよ、船旅と明月と、ロマンチックな雰囲気でのせい、私が気弱になっているせいだわ……」そう思いながら、彼女は鏡をのぞいて自分を慰めるようにふっと笑うと、くるりと向きを変えて服をかけ、電気を消して夜具に横たわった。

目を閉じて少し眠ったところ、月明かりを感じて目を開けると、月の光が部屋いっぱいにあふれていた。彼女は少し暑かったので、素足のまま起きていって丸窓をちょっと多めに開けると、また横になって毛布を胸までかけ、腕まくらをした。窓の外で海風のびゅうびゅうなる音が聞こえ、通路には規則正しく行ったり来たりする革靴の音が聞こえるようだった。

「遠はもう寝たかしら。」彼女は悶々とまた思い出した。「こんな月の夜に……二人つきり……もし十年前に別の選択をしていたら……」彼女はさっと頭を振ると、毛布を肩まで引っ張り上げ、目をかたく閉じた。

朝食に出かける前に、秋心は心に決めていた。「遠に何も悟られないようにしなければ、元々何もなかったのだし。あまり一緒にいないようにして、話もしないようにするの、仕事がたくさんあるのだから。それに、会議で発表する原稿を……」彼女はペンとノートをそろえ、食後にすぐ読書室へ行って書き物ができるよう準備した。ノートをかかえてドアの外に出たが、また戻って来て清楚な色の服に着替えた。

遠は昨夜と同じように立ち上がって彼女に椅子を引いてくれた。表情はあいかわらず穏やかで、ふっくらとした頬には健康的な赤味が浮かんでいた。秋心は目がしらが少し

痛く、頭も少し痛み、「寝不足だからすっきりしないのは仕方がないわ」と思いながらも、平然として遠と話をしていた。

九時に煙台^(イソクイ)*⁵に着いたら半日以上停泊する、船ではすることが無いから陸に上がってみないかと遠は言った。秋心は少しためらったが、微笑んで言った。「悪いけど遠慮するわ。報告の原稿を書かないといけないの。船が泊まって動かない間は、少し書きやすくなるでしょう、折角だからこの半日を利用したいの。」遠は強いては誘わず、朝食を済ませると挨拶をして席を離れた。

緑豊かな島々を迂回しながら船がゆっくりと港に入っていくと、朝日に照らされて海にも山にも光の霧がうっすらと漂っている。山上の林に連なる灰瓦が見え、すぐ近くに見える白い灯台は、木々と岩石の間に半分隠れている。はしけは行きかう小魚のように、船の脇に集まっている。遠が帽子をかぶりコートをかかえて小船から降り、見上げて彼女に気づくと笑って手を振るのが見えた。

彼女は身を翻して客室に入り、ノートを開いて講演のタイトルを記した。「婦女の二大問題 仕事と結婚」突然彼女は筆が進まなくなり、眉をよせて、じっと考えながらすでに書きつけたいくつかの文字の周りをぐるぐると丸く囲んだ。

昼食は一人で食べたが、かえて気楽だった。その後一眠りすると、三時にふと目が覚めた。窓の外にがやがやとさわがしい声が聞こえる。「船がもうすぐ出るらしいわ。遠はもう戻って来たでしょう。」彼女は起きて顔を洗うと、甲板に出た。

遠はちょうどタラップを上がってきたところで、左手に紙袋を抱え右手にバスケットを^さ提げ、彼女の方へやって来ると言った。

「この果物はとても出来が良い、この籠のブドウをご覧よ、うちの子供たちはこれが好きなんだ。」秋心も笑って、うつむいてバスケットを開け、言った。

「粒が大きくて、いい香りね。その紙袋は何なの。」

「これはレースだよ。家内からこのレースは安くて品^{しな}がよい、人にあげたいからたくさん買って来てと言われたんだ。僕はよく分からないから、適当に何枚か買ってみた。一緒に行ってくれたら助かったんだけどね。」秋心は無理に笑顔を見せ、黙っていた。

船はまたゆっくりと動いていた。この港から外国人観光客が大勢乗りこんでいた。ほとんどは避暑の帰りの親子連れで、船はにわかになぎやかになった。秋心と遠は手すりにもたれて子供たちの輪投げを見物していた。

秋心は尋ねた。

「お子さんはおいくつ。どなたに似ているの。」

「上は男でもう八歳、下は女でまだ五歳だ。誰に似ているかは難しいね、僕たち夫婦の半々かな。子供は不思議だよ、抱きあげて鏡の前に立ってみると、子どもが自分自身のようにも思えるし、また別の人間でもあるんだ……。」ここまで言うと、秋心が遠くを見つめ

ているのに気づき、言葉を飲み込んだ。秋心ははっと振り向き、笑って言った。

「聞いているわ、奥様はお若くておきれいなんでしょう。御家庭はきっととても幸せなんでしょうね。」言いながら秋心は遠をひたと見すえていた。遠はちょっと戸惑って言った。

「そう、妻は私より十歳ほど年下なんだ……上海に来たら、きっと家に泊まりに来てくれないといけないよ。」

「ありがとう、きっと行くわ。」このとき夕食の鐘がなったので、彼らは一緒に食堂に入った。

彼らのテーブルに、若い外国人夫婦と一人の子供が加わった。遠がその男性の方と知り合いだったので、近寄って挨拶し、皆を紹介し、握手して同じテーブルについたのだ。子供はまだ四、五才ほどで、赤い頬につぶらな瞳をし、元気が良くかわいらしい。母親は子供をつついて言った。「張小父さまよ。ご挨拶は。」その子にはこっとして遠に言った。「ハロー、張小父さま。」続いて秋心に笑いかけて言った。「張奥様、こんにちは。」秋心は思わず顔を赤くして口を開きかけると、遠が急いで言った。「こちらは何さんですよ。」母親もにこやかに言った。「ほら『失礼しました』とお言いなさい、紹介するのを忘れていたわね。」子供はただにこにこして、秋心を見上げていた。

秋心は言葉少なにその外国人の妻とだけ会話を交わしたが、遠は外国人の友だちと楽しげに語っていた。食後妻の方は子供を連れて休みに行った。遠は男性の方と喫煙室へ入って行った。秋心は部屋に戻ってコートを着ると、一人で船の上を歩いた。

月の光は昨夜よりも清々しく冷やかで、海風もいっそう強く寒くなったように思えて手すりの辺りには立ってられず、秋心は椅子を引いて移動し、吊るしてあるはしけの黒い影の下に座って風を避けながら月を眺めた。

甲板には人影がなく、船の進む音とうなるような波と風の音をのぞけば、辺りはしんと静かだった。月の光を浴びて波はほとんど白色に見え、真っ白な小波にたくさんの銀色の星が踊っている。その銀色の星の道は、彼女が座しているところから空のはてまで続いている。

「もしも海風に乗り、光の道を踏んで空のはてまで歩いていったら、……」彼女の心は詩情で溢れた。十年間の多忙な生活は、彼女に幻想を解き放つ暇を与えなかった。この二日間というもの仕事にまったく気が乗らないので、彼女はほとぼしる幻想に浸った。

「光の道とは何かしら。本当の『光の道』を歩くのもこの『波濤の中わずかに歩む』のと同じぐらい不可能だわ、昨日は壮大で快適な光の道に向かっていっているように見えたのに、今日は幻滅と暗黒へと続いているかもしれない。……十年前は光の道に見えたって、十年後には……」秋心は両の手のひらに顔を埋めた。

どれくらいたったのだろう、秋心は悄然と顔を上げ、遠が前方の手すりによりかかって微笑んで自分を見つめているのをみとめ、どきっとした。

秋心は頬を染めて笑った。

「いつ来たのよ、声も立てずに。おどかさないで。」遠は近寄ってきて彼女の椅子のそばに立ち、笑って言った。

「来てから大分経つよ、君が顔を覆って座っているのを見ると、邪魔する勇気がなかったんだ。」

秋心は答えず顔を上げて遠を見ると、また膝を抱えて明るい月をじっと見つめた。

遠はしばらく黙ってたたずんでいたが、言った。

「君は気を悪くしたんだろうが、子供が言ったことじゃないか、すぐ気にするんだから。以前と変わらないね……」秋心は突然立ち上がった。

「私が気を悪くしたですって、あの子が言ったことなんて別に気にしてやしないわ。言ってみたらどう、以前の私はどうだったのよ、……」彼女は言いながら激してきたように両手でコートをぎゅっと握りしめ、きつと遠をにらんだ。

遠も彼女を見ていたが、目にはふと優しい色を浮かべ、落ち着いた口調で言った。

「秋、君と僕との仲じゃないか、君の気分くらい察しがつくよ。今晚君は無口だったから、食事の後わざと君について行かなかったんだ。……今晚だけじゃない、この二日ずっと君は浮かない様子だと思っていた。」

秋心は相変わらずにらみつづけていたがちょっと心が揺らぎ、しばらく経つと目を伏せて腰を下ろし、言った。

「あなたが本当に私が浮かない様子だと感じていたのなら、ごめんなさい。ここ数年来、仕事が本当にきつくて、休暇になると周りのすべてが嫌になるばかりだわ。船旅を選んだのは、知り合いと知った道避けるためだったのに、まさか……」

遠も腰かけて、真面目な様子で尋ねた。

「真剣に、僕は君の生活の様子を知りたいんだ。仕事はどれくらい忙しいのかい。休日にはどんな気晴らしをしているのかい。仕事ばかりで楽しみがないと、気が滅入ってくるものだよ。」

秋心はそっとため息をついて、言った。

「仕事は本当に順調だけれど、それなりに悩みがあるの。休日には以前はよく実家に帰っていたけれど、母が亡くなってから兄弟たちがちりぢりになってしまったし、十年のうちに友だちもばらばらになって話し相手もいないわ。寂しさ、この寂しさは、時々……」彼女はまた無理に笑った。「そんなに深刻なわけではないのよ、でも忙しかったあとの寂しさは、あんまり……」彼女は口をつぐんだ。遠もおし黙ったまま空を見上げていた。

月が高く空に昇り、海風はますます強くなってきたので、秋心はため息をつきながら

立ち上がった。「下へ行きましょう、もう晚いわ。」そう言って立ち去ろうとした。

遠は手を伸ばして彼女を引き止めた。

「秋、君には友だちがまだ一人いるんだよ、永遠に忠実な友だちがね。僕の家は君の家だ、君さえよければいつでも歓迎するよ。」

秋心は寂しく笑った。「ありがとう、あなたの幸せで完璧な家に私みたいなよそ者が行ったりしたら、きっと……」

遠は彼女の手を握りしめた。「そんなことはとっくの昔に承知している。秋、もしあの時……」秋心は身体を固くして彼に手を預けており、涙はとうから頬をつたっていた。

遠はまた口を開いた。「寂しさか、僕も寂しくないとは言えない。子供たちを愛しているし、夫としてのつとめを果たしているけれど、時々僕も思うんだ、もしあの時……家も、子供も、今より百倍も千倍も……」

そのとき階段を数人が談笑しながら上がってきたため、しっかりと握り合っていた一対の手はゆっくりと離れた。

部屋に戻りぼんやりとベッドに座った秋心は、またもやひどく悔やみだした。この一時間の会話は自分が望んでいたものではない。なぜ十年ぶりに再会した遠の前で、隠してきた弱みを暴露してしまったのだろう。それに遠の家庭を破壊してしまったとしたら。彼女は考えるほどに滅入ってきて、歯がみしてつぶやいた。「明日から下船するまで、遠とは会わないことにしよう。」

翌朝は起き出さずにボーイに食事を運ばせようかと思ったが、そうしたら遠は彼女が悲しみのあまり具合が悪くなったのだと思い、復讐の快感を覚えるかもしれない。それで彼女は何事もなかったように部屋から出た。

遠も落ち着いてごく自然にしており、テーブルでは皆たださしさわりのない話をしていた。この日彼女は一人書見室にこもって講演原稿二本に取り組み、黄昏前には書きあげてしまい、気分がすっきりした。

夕食の前に彼女は一眠りしてから、髪を直して甲板に出てしばらくたたずんでいた。今夜はちょうど満月で、海には光の霧がぼうっと立ち昇っている。いらいらと歩き回る彼女は、まる一日根をつめたために心がまた憂鬱に陥ったようだ。「これが旅の最後の日、最後の日の明月だわ……明日からまた煩わしい現実。」彼女はかすかにため息をついた。振り返ると遠が向こうから歩いてくるのが見えたので急いで目をそらし、食事の鐘の音の中、人々とともにレストランに入った。

食事が済み、子供を部屋に送り帰して寝かせると、若い外国人夫婦は船の上へお月見に行きましょと誘った。秋心はどうしてもよかったが賛成した。遠は秋心が黙っているのを見て、やはりついて上がって来た。

月を愛でながら話も弾み、皆大いに楽しんだ。若い外国人夫婦は殊に陽気で快活で、話すうちに、夫婦はしばしば自分たちの恋愛時代の情熱についてからかい合った。女性は笑って言った。

「もし私がこの人と結婚してあげなかったら、彼は一生楽しみもなく、秋の夜に月を見ることも冬の夜にストーブを囲むこともなかったでしょうよ。いいこと、この人が一生ストーブを囲まないだろうと同情して、私は一緒になったのですよ。」

「とんでもない、私は彼女がオールド・ミスになるだろうと心配して嫁にしてあげたんだよ。」言いながら二人は大笑いした。遠も実にほがらかに笑ったが、秋心はちょっと調子を合わせただけですぐ笑いを止めてしまった。

しばらくすると、遠がまず立ち上がって言った。

「申し訳ないが、お先に失礼するよ。明朝には到着するから、荷物をまとめておかないとね。」

「そんなに急ぐことはないでしょう、こんなに良い月はめったにない、もう少し話しましょうよ。」夫婦は言った。秋心も遠を見て言った。

「もうちょっと待って、みんなで一緒に降りていきましょうよ。」

「だめなんだ、明日家の子供たちが出迎えに来るに決まっているんだが、子供に買った北平のお土産を全部スーツケースの底にしまい込んでしまっただけでね。前もって出しておきたいんだ、明日子供たちがお土産お土産と騒ぐといけなから。」遠は微笑んで言った。秋心は口をつぐんだ。夫婦は笑った。

「あなたは本当にいい父親ですね。私たちも降りなければ、万が一子供が目を覚まして、私たちがいないと知ったらまずいから。」二人は言いながら立ち上がった。秋心は座ったまま顔をあげて笑って言った。

「どうぞ先にいらして、私はもう少し残りますわ。」遠は階段のところまで行くと、振り向いてやさしく言った、「今夜は寒いから、ちょっとしたらすぐ降りた方がいいよ。」

翌日はまた曇りで、うっすらとした朝霧の中「順天号」は徐々に呉淞口フーソンコウに入った。眠れぬ夜を過ごした秋心は一人手すりにもたれており、掃除をしている船員たち以外、甲板には誰もいなかった。朝もやの中から、両側に建ち並ぶ建物と大きな木の看板が一枚一枚見えてきた。秋心はぐったりして眉をひそめた。「いつも曇り、……全とうんざりすることばかり。今日の会議から出迎えが来るのかしら。……遠の子供は……遠の家は……もしかしたら彼は、……」ここまで考えたところでさっと頭を振り、一人ふらふらと部屋に入った。

客たちは一人二人と起き出して、皆そそくさと朝ご飯を済ました。それぞれ手早くスーツケースを整理し、手すりに近い階段の入り口までボーイに運ばせ、その側に控えてい

る。この混乱の中、秋心もコートを着こみハンドバッグとスーツケースを提げて出てきた。そのときにはもう立ち並ぶ建物が間近に見え、港の人声かまびすしく、船はしずしずと港に近づいていった。ふいに遠が後ろの方で叫ぶのが聞こえ、秋心が振り向くと遠は満面の笑顔で港に向かって呼んでいる。彼が手を振る方を見れば、人ごみに若い婦人が一人立ち、前に並んだ二人の子供の肩に両手をかけていた。タラップが下りると彼らは真っ先にはしゃぎながらかけ上がって来た。遠は急いでタラップのところに行って、子供たちの手を取って客室の入り口へ引っ張っていった。

秋心は乗客達について降りるのも忘れ、この幸せそうな一団をじっと見つめていた。遠の妻はとても若くてほっそりとし、髪にウェーブをかけ、髪の内側には大粒の真珠のピアスがのぞいており、ふっくらとした顔には程良く化粧をほどこし、白地に大きな赤い花模様の絹の長衣を身につけている。全身に若々しさが溢れ、ちっとも所帯じみたところがない。男の子は帽子を背にぶらさげ、白い上着に青いフランネルのズボンだ。女の子は短い髪を眉のところでそろえ、クリーム色のワンピースの上に丸襟でクリーム色の半袖ニット。二人ともむっちりとした白い腿を膝上までのぞかせていた。

一家はにこにこしながら互いに報告しあっている。女の子は父を見上げて腿に抱きついており、きりっとした眉が遠にそっくりだ。男の子は母親と手をつないで笑顔で傍らに立っていたが、その小さな唇は遠の妻と爪二つであった。

遠は突然振り向き、秋心が階段の前に立っているのを見ると、急いで子供たちの手を引いてやって来て、彼の妻もそれに従った。遠はそれぞれを紹介した。子供たちは秋心に簡単に挨拶すると、遠の両手を引っ張って言った。「パパ、車は埠頭だよ、乗ろうよ。」遠は子供をたしなめながらスーツケースを提げ、秋心に言った。「迎えは来るのかい。来ないのなら車で送るよ。先に僕の家へ寄ってもいい。」遠の妻も笑顔で言った。「そうね何さん、まずうちで休んでいらしたら。」秋心は急いで言った。「ありがとう、迎えが来ますの、港にいるのを見かけましたわ。どうぞ先にいらして。」

夫婦は子供たちに手を引っ張られながらタラップを降りた。秋心は彼らが車に乗り、何かの手が窓から彼女に振られているのを見つめた。車はゆっくりと動き出し、角を曲がった……

もう船の上の客はほとんど下りてしまい、埠頭の人々もだんだんと散っていった。秋心は自分でスーツケースを持ち、ゆっくりと船から岸に下り立ち、しばしたたずんでんよりとした四方を見渡すと、一陣の西風が彼女の無表情な顔をなで、ひゅうひゅうと吹きつけ、船つき場に散らばっているわらくずと塵が地にうず巻いた。

注

1 * 西風。多く秋風を指す。

- 2 * 中華民国時代の北京の呼称。
- 3 * 塘沽は天津市から海河を下り南東60キロのところにある町。
- 4 * 大沽口は塘沽からさらに下り、海河が渤海に流れこむ河口に位置する。
- 5 * 煙台は山東省東部の重要な港である。
- 6 * 呉淞口は、上海市を突っ切る黄浦江の河口。

